

辞書を“味方”につけて 中国語をもものにごよう！

来春刊行『東方中国語辞典』をめぐる

相原 茂（お茶の水女子大学教授）
荒川清秀（愛知大学教授）
大川完三郎（中央大学教授）

◆中国人の頭の中を辞書にしたい 日中合作を反映した中国語辞典

相原 だいたい二〇年くらい前、安井正幸社長の時代ですけれども、東方書店でも辞書を作りたいということで、中国の商務印書館に行つて「中国人ではなくて外国人のための辞書を作つてほしい」という話をしたんです。その時の基本的なコンセプトは、「中国人の頭の中にある言語情報を辞書に書き出す」ということだったんです。つまりそれは日本人が見落としがちな身近な用例を収録するとか、類義語の微妙なニュアンスの違いを解説するとか、百科項目では、中国人なら誰もが慣れ親しんでいる人名や地名、モノや言葉のイメージまで盛り込んでしまおうということだったんです。

中国側はこちらの要望を受けてどんどん原稿を書いて、それが結果として中国では二〇〇〇年発行の『用典』（応用漢語辞典）という形になった。ですから『用』のものとの企画やいろんなアイデアは、こちらから持ちかけたものです。「東方中国語辞典」は中国側と共同で内容を編纂して、それに基づいて学習者に便利ないように日本側で編集を施したものです。

大川 最初はやはり、『用』と同時に出版するというこゝろでやったはずですね。

荒川 原稿そのものは中国側が作つて、そこにいろいろな方針をこちらが立てた。原稿ができた段階で加工するというこゝろですね。

相原 日本人が要望やアイデアを出し、中国人が最初にデータ原稿を書いたという意味で、ちよつと独特でしたね。

荒川 日本側で削つたところもありますね。

相原 語彙としては、やはり正直言つて商務の編集だから、難解なものがあったんです。普通の人の頭にはないようなもの、あまりにもペダンティック（衛学的）なものとか、削つたところがあります。

荒川 それもあるけれど、まず文語的な文字は全般的にみて、ある段階でかなり削つてもらいましたね。

大川 向こうの知識人としては普通のことかもしれないけれども、我々日本人が使う学習辞典としては、

あまりにも難しい、必要ないところがあったと思います。

荒川 『用』という辞書が中国で学習辞典として出てくるかというところではない。『代典』（現代漢語詞典）に対抗するものとして出ていると思うんです。したがつて我々が考える辞書との間に距離があつて、それをどうやって埋めるかというのが、一つの課題であつたと思うんです。その過程の一つが難しい文字を削るということだった。用例についても、「辞書は模範的であるべきだ」とか、「人々に教え諭すものである」というようなものがたくさんあつた。それもかなり削りました。

たとえば「加重」という語がありますが、車両は「加重」してはいけないとか、「加重」とすると事故を起こすとか、郵便は「加重」とすると切手を余分に貼らなくてはいけないとか、こういう例文はどうかという気がしました。

大川 民を教えるという意識がついつい例文に反映されてしまつたのかもしれないね。

相原 商務の編集には、一つには『現漢』とは違う、二つめには北京語言大学の外国人向けの中国語辞書とは違うという、二つの思いがあつたんですね。そこにどうしても、「これが辞書だ」というインテリの自負みたいなものがあつた。こちらから提示した、用例をたくさんつけること、百科項目をつけること、類義語弁別をつけることは反映されていますが、外国人向け中国語教育の視点はなかつた。それは私たちにとつてはちよつと残念でした。まあ、そこが工夫のしどころでもあつたわけですけど。

荒川 ただ、我々からの刺激によつて『現漢』と違うものを作りたいという気持ちで商務が持つたということ、こちらも彼らの『応用』にある意味で貢献したということは言えますね。

大川 我々が言つた意見はけっこう取り入れてくれたと思いますよ。出てきた原稿はかならずしもこちらの考えるものではなかつたのですが。

相原 そうですね。今回は、辞書作りにおいてネイティブが作るものと日本人学習者が求めるものの違いが見えてきた、そういうところがあるかもしれない

ん。それだけに、この辞書は単なる翻訳ではなくて、実際に中国語を教えている人、ありていに言えば大学の研究者の知識・体験や教学経験を反映していると言えます。日本人教員ならではの、プラスアルファの情報が加わっているということは、大いに期待していいと思います。

❖二六年の連載が実った類義語弁別「どうちがう？」

相原 辞書の企画と同時に『東方』で始まった連載として、「類義語のニュアンス」があるんです。類義語弁別というものは、それまで日本の中国語の辞書ではあまりなかったわけですね。それが非常に大切だと思つたものですから、この連載を始めた。今から一六年前だから、かなり早くから始めたんです。ついでこの間連載が終わりましたけれども、執筆者延べ人数が二〇四名、一九六回を数えました。その成果がこの辞書に吸収・反映されるのです。

荒川 その前に『中国語類義語のニュアンス』とか『どうちがう？』という形でも出しました。

相原 本としては、この一六年間の成果として単行本二冊を出したわけです。

荒川 辞書に結実する前に本や雑誌で公表するということは、他の面でもやりました。「辞書工房から」とか、「東方語源学院」もそうだし……。

相原 「辞書工房から」では、参加してくれた執筆者の方々に、この辞書を編纂する過程で気が付いたいろんなことを出していただきました。こんなことがあるんだ、という知識の共有の場みたいなところがありましたね。もう一つは「東方語源学院」という名前をつけたんですが、語源が結局、およそ一〇〇になつたんですよ。それもこの辞書の中にちりばめられます。語源というのは、あまり学問になじまないという考え方がこれまでありましたけれども、ひよつとして俗説かもしれないけれども、やはり普通の中国人の頭の中には、このようなイメージがある。そういう意味では言語情報の共有になり、いいんじゃないかということですよ。

荒川 小学館の『日本国語大辞典』でも語源をどうするか、もめたことがあります。最終的には併記して載せました。学問的にははつきりしないところがあるけれども、載せるといふ立場を貫いた。確かに語源俗解というのがありますが、みんなが共有している知識だとしたら、それはそれで意義があると言えらるでしょうね。

❖用例は辞書の命——日本人に必要な用例は

荒川 これは今、どの辞書でもそういう方向ですけれども、どういう言葉と組み合わせるのかという「塔

配”に配慮しています。たとえば「鉛筆」という単語があつた場合に、「鉛筆を買いました」というような用例はほとんど意味がない。そうではなくて、「鉛筆を削る」とか、「鉛筆が折れた」とか、こういう用例があるわけです。どういう用例が中国語の学習に役立つかという観点が必要です。これは難しいんですが。

相原 よく「用例は辞書の命だ」と言われますね。日本側からこうしてくれと言つた話はいろいろありますが、もちろん用例を多くして下さいということは言いました。例えば離合詞はこの辞書ではピンイン間の「ㄨ」で示されていますけれども、離合詞はどういうふうに離れるのか、どんな要素が間に入るのか、ちよつと分らないところがある。できるだけそういうところには、二つか三つは離れる例を入れてくれ、取捨選択はこちらでするからと。ですから基本的にこの辞書は、ほかの辞書よりは用例が豊富なはずですよ。

大川 用例に語らせるというか、そういう辞書がいいですね。スペースが限られている場合、「この動詞は二重目的語をとる」という記述より、典型的な例文を一つ示した方がいいわけです。やはり用例というのは、そういう意味で命なんじゃないでしょうかね。ただ中国側の原稿には、あまり適切といえない用例も多かったですね。

荒川 外国人にとつて必要な例がない。中国人にとつて常識的な例があつても、我々にとつて欲しい例がないということが、かなりありました。

大川 用例というのは、やはり我々が必要な用例と、彼らが必要とするものは違つてくるんだと思うんですよ。例えば「眼」という単語が出てきますけれども、「戴眼」というのは絶対必要ですよ。その他に「眼鏡を作る」は「配眼」というように「配」を使うわけでしょう。「作る」だから「做」というわけではないんですよ。

相原 それは、出版社の編集者というものの性格が反映していますよ。語言学院の先生方に作らせたら違うし、別の出版社の編集部だったらまた違う。それはしようがないんですよ。

大川 「搭配」の中でも、本当に当り前の「搭配」は、書かれていなかったわけですね。むしろ誰でも知っていることが我々は欲しかったのです。そのぶん日本側で補いましたよ。

荒川 ただ、中国人独特の用例はあつていいと思うんですよ。「時間を浪費することは「慢性自殺」(慢性の自殺だ)」なんていう用例、これなんかは我々が絶対に作れない例文です。それから一つの動物が出てきた場合に、ウマならウマからこういう諺が浮かぶ

とか。中国人がその言葉から浮かぶようなイメージにつながるような例文……。

相原 カラスと言ったら「天下」とか、ウシだと魯迅の「犛子牛」っていうように……。

荒川 これはあったと思うな。「烏鴉」の例文には「天下一般」っていうのはありましたね。

相原 わりとそういうのは出てくるんですよ。ぱつと口をついて出るフレーズを取り入れてますからね。

◆文法理解に役立つ品詞分類

大川 今回は、品詞で敢えて自立語でない部分も入れたんですよ。いちばん大きいのは、やはり区別詞という概念を受け入れたということですか。

荒川 品詞は、今の辞書では載せるのがほとんど当たり前になつてきましたが、かつてはなかなか載せられなかったし、『現漢』は未だに慎重で載せていないんです。品詞というのは、独立して使えるもの、単語として認定されるものにつける。ただ独立した単語にはならなくても、中国語では最小の意味を持った単位、つまり形態素が独自の働きをすることがある。それに対してこの辞書では、形容字・動詞字のような情報を入れましたね。これは陸志韋が『的法』（漢語的講詞法）で取った方法ですけれども。

相原 形態素にも、品詞に準ずる性格を認めたとということですよ。あと、品詞そのものの考え方は、だいたい現在の標準的な言語学の考え方を採用しています。要するに「快走」の「快」みたいなものは、形容詞が状語として使われていると見る、一つの品詞が多機能だという考え方に立っています。

大川 それはいわゆる「兼類」ではないということですね。

相原 そうですね、兼類はあまり取らなかったですね。兼類の考え方もちよつとやつかいだから。まあ辞書なので、言語学の先端的な考え方で、「代詞はいらない」とかそういうことはしていません。やはり学習者のための標準的な、オーソドックスな考え方を出しているということですね。

◆中国語学習をサポートする百科項目 人名地名・呼応構文・成語・コミュニケーションバンク・百科世界

相原 例えば日本でも、「軽井沢」というとただの地名じゃなくて避暑地だとか、「五右衛門」というと泥棒で釜ゆでになつたという常識がありますね。そういうふうには、中国人が知っている地名や人名も入りたいと思つたんです。

荒川 人名について言うと、『用』とは違う抽出をしているわけでしょう。

相原 中国語学習において我々が知っておかなければ

いけない中国人の人名、二〇〇人を選びました。実在の人名はもちろん「阿Q」や「阿凡提」も含むんです。

大川 それから新語もかなりフォローしましたね。

相原 新語に関しては現在中国で多く出ている資料から、北京大学の先生に、これは必要だと思ふものをリストアップしていただきました。「非典」(SARS)などという最新語もフォローしています。

それから、一つの特徴になるのは成語ですね。成語は、意味が分かつて使えることが要点ですが、日本人としてはその内部構造が分かつたほうがいいので、いまさら漢文訓読というわけにはいきませんが、各要素間の関係がしらじらと見えるようにしました。これを仮に「スケルトン解釈」と呼んだんですけれども、直訳あるいは最低限の語釈を入れながら、構造理解に役立つようにしました。

荒川 これは東方書店としては先に『中国成語辞典』を作っていますから、蓄積はありました。成語は決まった形をまるごと使うわけだけど、いま相原さんが言つたように、いきなり比喩的な意味や転義だけを、もとの構造を見ないで覚えるのは非常に苦痛なわけです。不透明を透明にしようと努力したということですね。

相原 第二言語として学ぶ場合には、中身が分かつたほうが記憶に残る。そういう配慮をしたということですね。

荒川 「呼応構文」は、最初の段階では見出しとして入つていなかったですね。

相原 やはり学習者のために「即使…也」や「因…所以…」も呼応構文として加えて、かついろんな例をあげるという工夫を加えたわけです。

荒川 英語の学習辞典などではだいたい、ある場面にかかわる常用表現を入れていますが、この辞書でも早くからこういうことを計画していて、「コミュニケーションバンク」として入れました。辞書を使うなかで、ここに来れば、いろんな日常会話を勉強できる。ある意味で学習辞典としての一つの基軸だという気がします。

相原 大きな囲みでは「百科世界」というのも設けました。これは、中国関係の書籍をいろんな分野にわたつて出版している東方書店ならではの人脈で、たくさん先生の登場していただきました。そういう意味では、広く日本の「中国」学者の方々に協力していただいて、正確かつ充実した囲みになつたんじゃないかと思えます。

◆もっと辞書を使おう

大川 今回は巻末に日中小辞典をつけていますね。や

やはり学生は最初、両方買うことはなかなかできないから、必要な時にはその小辞典から中国語をひいて、その中国語をもう一度辞書で引いて活用できる……。

相原 新学期で中日辞典をまず買って、また日中辞典を買えというのも心苦しいところがある。とりあえず日中辞典があれば、本文の該当する中国語に戻って、用例・意味などを確認できる。しばらくはこれ一冊で間に合うという重宝な機能がついていれば、先生も奨めやすいんじゃないでしょうか。

荒川 日中辞典というのは、学生が「日中辞典にあつた」と言うと、先生によつては「そんなことは言わない」とか、「これはおかしい」とか言われることが多いんですよ。我々が作文する場合は、自分の経験した中国語の例を思い出しながら作っていくのが、いちばん確実なやり方です。そういう時に日中辞典は、最初はちよつとヒントを得るために使つて、中日のほうでそれを読む。こういう過程が、勉強の方法として大事ではないかと僕は思います。ドイツ語・フランス語の辞書には、後ろについていて、とても重宝しました。そういう意味でここに「日中辞典」がついているのは、小さいと言われるかも知れないけれど、案外便利なものだと思います。

大川 一万語余りですよ。

相原 今はつけるのが流行りになっていますね。

荒川 学習辞典としては、必須のものになっています。

大川 倉石武四郎先生の『岩波中国語辞典』なんかもほら、後ろに分類語彙集があつたでしょう？ あれけつこう利用したものですよ。

荒川 そう言われてますね。

大川 愛知（『中日大辞典』）の日本語索引もいいですよ。ね。だいたい二万語ぐらいあるんですよ。

荒川 愛知のは面白くて、本文の訳語から逆に拾っている。

大川 今はテキストが異常に親切で、初級・中級も含めて語釈がついています。たとえそれがついていても、もう一回辞書を引くぐらいの習慣をつけて、テキストにない情報もついでに集めるという使い方をして欲しいんですよ。語釈がついているテキストが今では当たり前になっていますけれども、言葉は一対一できれいに対応しているわけではありません。それだけで良しとしないで、やはり辞典を引いてほしいと思います。

荒川 うちの院生なんですけれど、購読の時間に、東方書店の『精選日中・中日辞典』を愛用している学生がいて、きいてみると、他の辞書は持つていないというんです。——訳語があればいいみたいな、そういう辞書の使い方をしている人はそれなりにいる

と思うんです。でもやはり辞書というのは、一つの言葉を引きいたときに、もう少しまわりの情報まで得られるものでなくてはいけません。そのためには辞書を読まなくてはいけませんけれど、今までの文字ばかりの辞書は、非常に読むのが苦痛だった。最近だんだん辞書は変わってきて、学習辞典と銘打っている辞書なんかは、「読む」のではなくてまず「見させる」みたいな、視覚的に引きつけるものを持つている。今度の我々の辞書も、そういう面を多少出せたんじゃないかという気はします。

大川 やはりパラパラつと見て楽しいという、そういう辞書を目指して我々はやってきたわけですから。

荒川 そうですね。文字ばかり並んでいるというのは、苦痛ですよ。そういう辞書も、かなりマニアックな段階になればいいかもしれないけれども、もつと辞書に親しませるということを、作る側が考えなくてはいいですね。

相原 あと、それぞれの辞書に個性がありますから、いろんな辞書を引いているうちに、自分の好みの辞書が出てきますね。それから「この辞書には出てないけど、ひよつとしたらあの辞書には出てくるかもしれない」と見当がつくようになる。何人かガールフレンドがいて、「あの子なら知ってるかな」とか、そういうセンスで使いこなすということは、あつてだんそういうことをしているはずですよ。

大川 そうですね。私は教室では一冊だけ奨めるけれども、でも実際はいろんな辞書があつて、それぞれ特徴があると面白いんですよ。そういうことを最初から説明しても学生は迷うばかりだから、この辞書がいいんじゃないかと言うんです。でも本当はそうじゃないということも、学生に知ってほしいですね。

荒川 まずこの一冊という言い方をすれば、余裕があればこの辞書も買ってくださいと。辞書はそれぞれ違いますよ。辞書に違いがあるという発想があまりないんじゃないですかね。

大川 辞書に出ているとついでという、金科玉条みたいに考えちゃう学生がいますもんね。かと思うと「辞書に出てませんか」と仏頂面の学生もいます。

相原 そういう人には先生方は必ず「えっ、どの辞書？」って聞く。というのは、辞書にはそれぞれ違いがあるということも、先生方は知っているといるということですね。

大川 勉強しはじめた学生には難しいことだけれども、こういうことを調べるんだつたらこの辞書というふうな、だんだん当たりがついてくるんです。こうなると勉強も楽しくなりますね。